

### はじめに

『養老令』(757)には、衛門府門部が管轄する「宮城門」が登場します。「大宝令」(701)では、「外門」とされる門ですが、一般的には奈良時代の平城宮朱雀門が該当すると考えられています(浅野 1990 p.25 図1)。朱雀門の語源である朱雀とは、古代中国で天の四方を司る四神と呼ばれた神獣で、北の玄武に対して南に対置されます。平城京のモデルとなった唐長安城では、宮城の南側に皇城が位置しますが、宮城北門が玄武門、皇城南門が朱雀門と呼称されていました。宮城・皇城が一体で1つの内城と認識されていたため、玄武・朱雀が南北に対置されたのです。宮城(太極宮)正門は承天門で、門前左右には闕・東西朝堂・肺石・登聞鼓といった重要な機構が置かれていました。ひるがえって平城宮を見てみると、朱雀門には特別な附帯施設はありませんが、令和4年3月に完成した中央区大極殿南門には、東西に楼閣が附設されています。日本では宮城門と考えられている朱雀門ではなく、なぜ、大極殿南門に楼閣があるのでしょうか。この疑問について、中国都城との比較を通して考えてみたいと思います。

### (1) 中国における宮城正門の機能と構造

中国都城において、宮城正門には特別な意義が付与されてきました。1987年に公開されたベルナルド・ベルトルッチ監督の名作映画「ラストエンペラー」では、宣統帝溥儀が紫禁城から追放される際に、宮城正門：午門から出てくるシーンが描かれています。午門は南面左右に翼を広げたような特殊な構造をしており、皇帝のみが通行を許される中央御道を通じて、溥儀は紫禁城から退去することになります。溥儀の時代から変わらぬ姿で現代に残る午門ですが、もともとは元大都の宮城正門：崇天門の系譜を引く門になります。アメリカのネルソン・アトキンス美術館に収蔵される元人『宦迹図』には、在りし日の崇天門が描かれています(林 2011)。更に遡って北宋開封城の宮城正門：宣徳門は遼寧省博物館が所蔵する「鹵簿鐘」に描かれており(韓 2016)、やはり門前左右に突出部、すなわち闕を持っています。この北宋開封城宣徳門の祖型となったのが、写真1にある唐洛陽城宮城正門の応天門です。写真は発掘成果を基に復原された姿ですが、巨大な重層の楼門の左右には飛楼が伸び、門前左右には母闕に2つの子闕が附く最高格式の「三出闕」構造が採用されています。

発掘では確認されていませんが、唐長安城太極宮の承天門も同じ構造と考えられています(羅 2019)。

唐長安城の宮城正門：承天門にも左右に闕があり、門前には東に肺石(民が上に立ち地方官吏の不正を訴える)、西に登聞鼓(文字の書けない民が打ち鳴らして冤罪を訴える)が設置され、儀礼・訴訟・裁判などが行われる東西朝堂がありました(佐藤 1977)。中国の宮城正門は、皇帝権力を表象すると同時に、皇帝と臣下・民衆の境界に位置して、両者を相互に結びつける機能を持っていました。皇帝へと直接繋がる場所だからこそ、「目安箱」となる装置が存在したのです。また、唐宮城が持つ3つの朝廷(三朝)における最南端の「外朝」として様々な国家的な儀礼が施行される場所でもありました。唐高宗の663年以降は、その機能が大明宮含元殿へと移され、元正冬至の大朝会(杜 2012)なども開催されました。

以上、中国都城の長い歴史の中で、宮城正門は皇帝権力と接する場所ゆえに、儀礼空間としての象徴的な機能と、両翼・闕を持つ特徴的な構造を発展させてきました。

### (2) 日本における大極殿南門の機能と構造

奈良時代の天皇は、即位・元日朝賀など国家的な儀礼の際に大極殿に出御し、節会などの饗宴の際に大極殿南門(閣門)に出御しました。前者を「大極殿出御型」、後者を「閣門出御型」と呼びます(橋本 1986)。天皇が大極殿南門に出御する場合、臣下はその南側の朝庭を囲む朝堂に座って、天皇と共同飲食し一体感を共有しました。平城宮では、天皇の空間である大極殿院と臣下の空間である朝堂院の境界に、象徴的な意義・機能が付与された点がわかります。

注目すべきは、平城宮中央区大極殿南門(写真2)の東西に、東楼・西楼と呼ばれる楼閣が附設されている点です。唐都城では、基本的に宮城正門にのみ闕(含元殿の場合は閣)が附帯しますので、大極殿南門が特別な設計だとわかります。平城宮を遡る藤原宮の大極殿南門(院外左右に東楼・西楼)では、赦宥儀礼が行われており、唐長安城承天門の制度を受容したという説もあります(佐竹 1988)。『続日本紀』和銅3年(710)の藤原宮で行われた朝賀の記事には「皇城門外朱雀路」とありますが、朱雀門が唐皇城正門(内城正門)と認識された段階があった点が分かります。つまり、藤原宮・平城宮造営時には、大極殿南門に唐宮城正門と同じく天皇権力

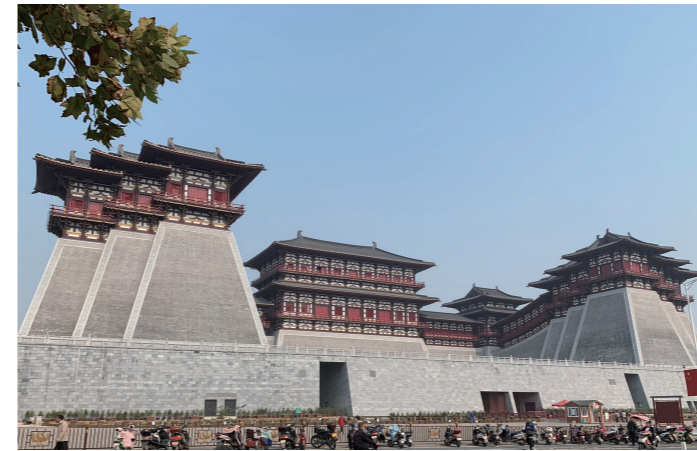


写真1 復原された唐洛陽城宮城正門の応天門

を象徴する役割が付与されたため、東西楼閣が附設される特別な構造に設計されたと考えられます。私は、天皇と臣下の境界に位置し、儀礼の中核として機能した門を「儀礼的宮城正門」と呼んでいます。藤原宮・平城宮では、大極殿南門が儀礼的宮城正門として機能しましたが、長岡宮では朝堂院南門(金子 2014)、平安宮では朝集院南門(応天門)に中国式の闕門が採用されるなど、徐々に南下する点が、日本都城の空間構造における特徴だと考えています(城倉 2021)。

### (3) 宮城正門の象徴性とその伝播

中国の宮城正門の機能・構造を整理した上で、日本都城の「宮城正門」について考えてみました。日本都城では、唐のように宮城・皇城が南北に配置されておらず、皇城内に宮城を包摂する構造をしています。しかし、内城の中に宮城を配置する中国都城の基本的な「重圏構造」は常に意識されていたと思われます。そして、各都城の「宮内」において、天皇と臣下の境界にあたる門に、唐宮城正門と同じく象徴的な意味が付与され、儀礼空間として発達したと考えられます。

以上、日本都城は唐長安城・洛陽城の基本構造を模倣してはいますが、日本の伝統的な統治体制や、天皇権力のあり方に沿う形で、中国式の思想空間が再構成された点が重要です。中国都城の思想がどのように解体・再編成されたのか、を国際比較により追及する研究が重要だと分かります。

### おわりに

宮城正門の象徴性について、国際比較の視点から考えてみました。北京にある紫禁城の午門は現存しており、唐洛陽城



写真2 復原された平城宮中央区の大極殿南門

の応天門も復原建物(発掘遺構を含む)を見学できます。また、奈良の平城宮では完成した大極殿南門を見ることが出来ます。その構造の背景にある思想的・歴史的背景を想像しながら、「宮城正門」を見学してみたいはいかがでしょうか。

### 引用文献(本文記載順)

- 浅野 充 1990 「古代天皇制国家の成立と宮都の門」『日本史研究』338
- 林梅村 2011 「元大都の凱旋門」『上海文博論叢』2011-2
- 韓建華 2016 「北宋西京宮城五鳳樓研究」『楊州城考古學術檢討會論文集』科学出版社
- 羅瑾歆 2019 「唐長安城太極宮承天門形制初探」『考古』2019-12
- 佐藤武敏 1977 「唐の朝堂について」『難波宮と日本古代国家』塙書房
- 杜文玉 2012 「唐大明宮含元殿与外朝朝会制度」『唐史論叢』15 陝西師範大学出版社
- 橋本義則 1986 「朝政・朝儀の展開」『日本の古代 第7巻 まつりごとの展開』中央公論社
- 佐竹 昭 1988 「藤原宮と朝廷の赦宥儀礼」『日本歴史』478
- 金子裕之 2014 『古代都城と律令祭祀』柳原出版
- 城倉正祥 2021 『唐代都城の空間構造とその展開』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所／早稲田大学リポジトリ <http://hdl.handle.net/2065/00081334>

※写真1 (2019年12月2日、執筆者撮影)。

※写真2 (奈良文化財研究所提供)。